

全国大会報告

日本色彩学会第56回全国大会 [米沢]'25 開催報告

Report on the 56th Annual Meeting of the Color Science Association of Japan, Yonezawa 2025

瀬川 かおり
Kaori Segawa

大会実行委員 / 横浜国立大学
Executive Committee, Yokohama National University

1. 第56回全国大会 [米沢]'25 の概要

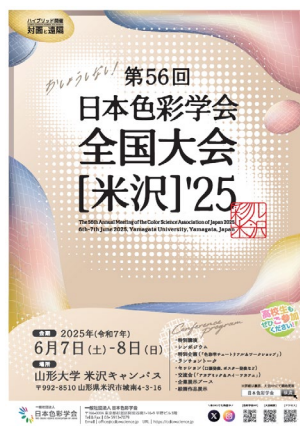
2025年6月7日(土)、8日(日)に、米沢市城南にある山形大学米沢キャンパスにて、日本色彩学会の第56回全国大会 [米沢]'25 が開催された。同キャンパスでの開催は2回目であり、前は10年前の2015年、実行委員長も2015年と同じく、山内泰樹氏(山形大学大学院)が担当した。キャンパスのほど近いところには、戦国時代の名将・上杉謙信を祀った上杉神社があり、また、キャンパス内には旧米沢高等工業学校本館(国の重要文化財)が残され、歴史を感じることができる土地柄であった。大会開催中の天候は、最高気温が30℃を超えるような6月上旬とは思えない暑い時間帯もあったが、好天に恵まれた2日間であった。

コロナウィルスのパンデミックにより、全国大会はしばらくの間、オンラインのみでの開催であったが、2023年度の第54回から、対面とオンライン参加のハイブリッド形式での開催となった。本大会も、同様に対面とオンライン参加のハイブリッド形式での開催となった。参加者は、招待した方も含め210名であった。

会場は米沢駅から若干離れており、また、公共交通機関の利便性もあまり高くないため、学会会場送迎用の大型バスを手配した。大会初日の午前中、東京方面からの新幹線の到着時間に合わせ、計3便米沢駅から会場まで参加者を送迎した。また、昼食については、会場近隣には飲食店が少なく、お昼の休憩時間の短さを考慮し、事前申し込みにより弁当を用意した。例年の全国大会の開始は総会が開催されるが、今回は総会と分離開催のため、総会は行われなかった。



大学正門



大会フライヤー 制作: しのだみほ氏

2. 高校生の全国大会への参加

日本色彩学会では、第55回大会から高校生への学会での発表および参加を働きかけている。近年、日本では少子化による18歳以下の人口が激減し、学会でも若手研究者の入会が少ない。そこで、さらに若い高校生に焦点を当て、高校生に色彩学を認知してもらうための試みとして行ってきた。今回の全国大会でも高校生に参加募集の案内を行った。また、高校生企画として「高校生向けチュートリアル・ワークショップ」および「高校生を囲むランチ会」を開催した。今回の発表件数は6件(口頭3件、ポスター3件、中学生を含む)であり、前回の3件から増加した。



中学生セッション

中高生セッション（口頭）および中高生によるポスター発表では、学生が大変熱心に発表していた。質疑応答では、中高生からの質問もいくつかあり、とても盛り上がった。また、発表者全員に対して「日本色彩学会全国大会発表特別賞」が実行委員長より手渡された。

「高校生向けチュートリアル・ワークショップ」では、坂田勝亮氏（元・女子美術大学）による「光と



ワークショップ

色の関係を探る“スペクトルビューワーを作ろう!!”が開催され、10名強の高校生が参加した。まずは坂田氏による光と色についての講義が行われ、参加者は色の特性について熱心に聞いていた。その後、チョコボール（森永製菓）のケースが配られ、スペクトルビュー

ワーの制作に取り掛かった。参加者のなかにはカッターの扱いに苦労している様子もみられたが、皆楽しそうに作業を行っていた。

「高校生を囲むランチ会」では、10名強の高校生が参加した。ビュッフェ形式の食事をしながら、数名の研究者（井澤氏、坂田氏、堀内氏、本吉氏、山内氏ら）との交流が行われた。高校生から“色彩研究とは？”など多数の質問があり、研究者の方々と熱心に会話をしている様子が見受けられた。

今回参加された中高生の多くの方から、楽しかった、また参加したいという声が寄せられた。今後の大会でもこのような企画を継続していってほしい。

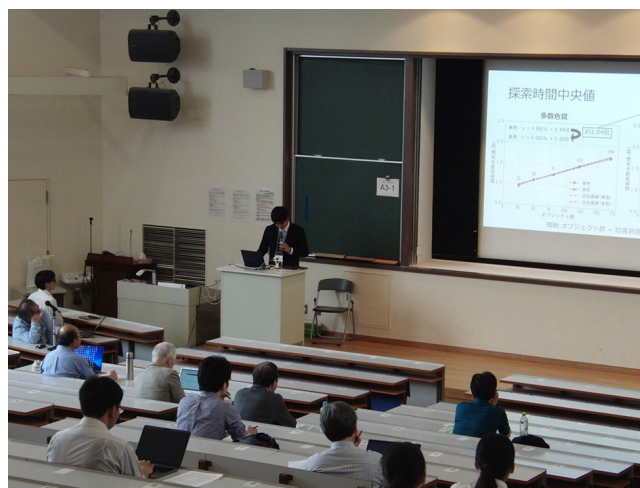
3. 研究発表

今回の全国大会では、中高生の研究発表の6件も含め、42件の口頭発表、31件のポスター発表の計73件の発表が行われた。この73件の内、カラーデザインと色彩芸術の部門の発表は2件（市原先生の2色覚者の作品の新たな世界の表出、北岡先生の視覚デザイン）であった。前年度と同様に今回も作品発表が少なく、応募数の増加は今後の検討課題である。また、発表奨励賞審査対象の申込件数が14件あり、学生の発表が多く見受けられた。今後も学生が会員を継続してもらえるような方策の検討が必要であろう。

本大会では、色彩情報、色覚・生理、色彩文化、肌、

測色など色彩の多岐にわたる内容での発表がみられた。口頭発表、ポスター発表の会場では活発な意見のやり取りがみられた。また、Internationalセッションは4件の発表（現地2件、オンライン2件）があり、幅広い内容の研究が英語で発表され、活発な質疑応答が交わされた。小規模ながら国際的な交流が全国大会内で行われ、日本色彩学会の多様化や発展のためにも、今後もこのセッションの継続が期待される。

本大会での口頭発表は発表数と時間の関係上3会場に分かれての実施となった。できる限り参加者の関心傾向が被らないようなプログラム編成を心掛けたが、セッション途中での会場移動を行っている方もみられ、多少せわしさも感じられた。また、ハイブリッド形式のため、会場のPCとオンライン参加者との接続トラブルなどがいくつかの会場で発生し、時間が超過してしまう場面もみられた。スムーズな進行のために、事前チェックなどの徹底が必要だと感じられた。



発表会場（口頭発表、ポスター）

4. 企業展示

日本色研事業株式会社, 株式会社 NAMOTO, 株式会社テクノオプティクス (旧, トプコンテクノハウス), コニカミノルタジャパン株式会社, 日本電色工業株式会社, 株式会社フィジオテック, ユニオンツール株式会社, DIC カラーデザイン株式会社, 株式会社システムズエンジニアリングの方々に企業展示に参加していただいた。多くの参加者が企業展示会場に足を運んでいた。NAMOTO のブースでは, Andrew Stockman 氏による LED 装置の説明があり, 等色関数の測定を実際に体験することができた。今回の展示では複数の企業がマルチチャンネル LED を取り扱い, 需要の高さを実感した。

5. 特別講演

大会初日, 最後のセッションにおいて, 山形県鶴岡市にある加茂水族館館長, 奥泉和也氏をお招きし, 「加茂水族館 クラゲ展示の奇跡」と題しての講演が行われた。講演では, まずは, 加茂水族館で様々な企画展示を立ち上げて来場者数が少ない長い低迷時代について, 水族館来場者数の歴史的推移のグラフをもとにユーモアを交えて語られた。その後, たまたま近海で捕まえたクラゲの企画展示を行ったところ, 思いがけず大当たりし, クラゲで全国的に有名な水族館になった。また, クラゲの生態について, 見る角度や光の当たり方で色の見え方が大きく変化すること, 飼育・繁殖に関する高度なノウハウを有することなどが紹介された。

6. シンポジウム

シンポジウム企画については, 実行委員会で数回に渡り話し合いが行われ, 山形にまつわる色彩というテーマを出し合った。そこで山形といえば紅花の一大産地であり, 紅花染めが盛んな地域であること, “紅”の対である“白”には, 米沢市の天然記念物である「吾妻の白猿」に焦点を当て, 参加者に地域の伝統や歴史, 文化を科学の視点から学んでもらえるような機会を設けた。シンポジウムのタイトル「米沢の貴き紅白～紅花染めと白猿～」とし, まずは「米沢市天然記念物「吾妻の白猿」は, 本当に白いニホンザルなのか」と題して, 小酒井貴晴氏 (山形大学大学院) に講演いただいた。希少な白いサルがなぜ体が白いのかのメカニズムについてご自身のこれまでの研究成果を報告された。次に, 「県産紅花を活用した試作品の開発」と題して, 平田充弘氏 (山形県工業技術センター) に講演いただいた。布の染色だけでなく, 様々な製

品に対して紅花の染色を試み, 新たな道を切り開いているお話をしていただいた。

7. ランチョントーク

本大会では, ランチョントークとして参加者に無料で弁当を提供し, 第一線の研究者による最新の色彩研究の話題を気軽に聴講できる機会を設けた。大会2日目の昼食時を利用して, Ming Ronnier Luo 氏 (Zhejiang University, China), Stockman 氏 (University College of London (UCL), UK) を講演



Stockman 氏のトーク

者として迎え, ランチョントークが行われた。テーマは, "Recent trends towards individualized color management" (カスタマイズ・カラーマネージメントに向けた最新の研究動向) であり, まずは, 会場で Stockman 氏が "Reproducing color for human observers: The challenges of individual differences and how to compensate for them" と題して, Thouslite 社 (中国) の新製品 LEDMax を用いて 100 名の観察者に対する等色関数を測定した実験の結果を報告した。個々の等色関数を求めることで, ディスプレイの色の見えの個々の最適化が可能となり, 等色関数の測定の有用性が示された。お弁当を食べながら和やかな雰囲気の中, トークが進められた。次に, Luo 氏がオンラインで "Color matching function affecting color reproduction on Displays" と題して, 100 名の観察者に対する等色関数を求め, 個々の等色関数が重要であることを報告した。残念ながら発表途中でネット接続に不具合が生じたため, Luo 氏の資料を Stockman 氏が代読し発表をまとめて下さった。質疑応答ではいくつかの質問, 意見交換が活発になされた。

8. 交流会

大会初日のプログラム終了後、山形大学米沢キャンパス内で学会会場の隣に位置する、最近建て直されたばかりの大学生協にて交流会を行った。今回の交流会では、コロナ禍以前の「アルコール付き交流会」の復活を計画し、実行委員会で度重なる打ち合わせを行い、実現に向けて話し合いが行われた。しかし、諸般の事情により、そのような開催が困難となった。それでも参加者に満足していただけるよう、実行委員のなかで地元精通しているメンバーが中心となり企画を練った。「アカデミック&スイーツカフェ ～アカデミックな交流を、地元推しのスイーツとともに～」として開催された。米沢の風習である、気軽なお菓子を用意し家を行き来する人付き合いがあることを体感してもらうことをコンセプトとした。会場では多種の米沢・山形の伝統菓子（玉庭、吾妻の白猿、矢の目団子など）や果物ジュースなどで懇談いただけるよう、ビュッフェ形式で提供した。また、地元で評判のシュークリームも準備したが、数に限りがあるため、会の最中にじゃんけん大会を行い、勝者に権利が与えられた。

開会にあたり大会実行委員長の山内氏から開会の挨拶があり、続いて、日本色彩学会会長の堀内隆彦氏よりご挨拶、乾杯のご発声をいただいた。司会は実行委員の田代氏が担当した。しばしの歓談の後、景品の抽選会を行った。景品には、ラーメン詰め合わせ、米沢織がまぐち、米沢牛ラー油、山形の米など地元の名産品が準備された。様々な地元の銘菓を楽しみながら交流を深めることができた。スイーツをメインにした交流会は珍しい試みであったが、参加者のお土産購入時の参考にもなり、地元還元できるメリットもある。他の学会でも採用したいなど、嬉しい言葉もいただいた。

9. 式典

第 56 回全国大会の最後のプログラムとして式典が行われた。式典では、まず、富永昌治氏が日本色彩学会賞を授与され、ご挨拶をいただいた。次に、阿山みよし氏が昨年度新設された馬場護郎賞を受賞し、ご挨拶をいただいた。続いて、論文賞（題目：Color representations of normals and congenital red-green color deficiencies based on differential scaling of color-names and color-naming experiments. 著者：Minoru Ohkoba, Tomoharu Ishikawa, Kota Kanari, Shoko Hira, Sakuichi Ohtsuka, Miyoshi Ayama. 掲載誌：COLOR research and application, Vol.49, No.6, 2024, pp.577～599）が表彰され、代表者の大古場稔氏からご挨拶をいただいた。その他、研究奨励賞には、何元元氏、活動功労賞には、吉澤陽介氏、賛助会員功労賞には、株式会社資生堂グローバルイノベーションセンター、株式会社 LIXIL、株式会社 PLASiST、倉敷紡績株式会社の 4 団体に贈られた。また、学生を含めた若手研究者が対象の発表奨励賞は、「ベイズの定理に基づく画像中の物体色の定量的な異同識別手法に関する検討」浅野雅人氏、「照明の配光条件が工芸品の見えに与える影響」佐藤啓人氏、「Comparative Analysis on Extraction Algorithms of Representative Colours of Five Ethnic Townscapes in Singapore」川澄夏子氏、「少数派色覚「デザイナー」のための知識・技能・方策の分析」山崎涼介氏の 4 名が受賞した。

今後の予定として、来年度の全国大会実行委員長である浅野晃氏（関西大学）より、立命館大学で開催されることが発表された。最後に、本大会実行委員長山内氏から、多くの方に参加いただき、充実した会となったことへの感謝が述べられ、大会が終了した。



交流会